

## 新刊紹介

坂井田夕起子『誰も知らない「西遊記」』龍溪書舎、2013年

水羽 信男

「玄奘三蔵の遺骨をめぐる東アジア戦後史」という副題を持つ本書は、タイトルだけ見るといかなる内容の書物が想像しにくいだろう。しかし日本の傀儡といわれた汪精衛政権統治下の南京で、1942年に出土した三蔵法師・玄奘の遺骨をめぐる数奇な物語を軸に、仏教と政治をめぐる中国（大陸・台湾）と日本の興味深い戦後史が、達意の筆致で生き生きと綴られる。著者の実証能力の高さはつとに知られているが、本書でも日中両国の新聞を全国紙だけでなく地方紙まで丹念に精査し、さらに中国・台湾・日本の各地に赴き未公開史料を精力的に発掘し、新たな研究テーマを開拓している。玄奘の遺骨にかかわる人々への著者自身のインタビューも、本書の価値を高めた。本書の構成は以下のとおり。序章、第1章「玄奘、南京で発見される」、第2章「玄奘、日本へわたる」、第3章「玄奘、台湾へわたる」、第4章「玄奘、日本各地を旅する」、第5章「玄奘、中国で政治に翻弄される」、第6章「玄奘、日本と中国そして台湾を結ぶ」。なお末尾には谷田関次「大報恩寺三蔵塔遺址発掘の顛末」（1944年）が資料として収録されている。

拙稿では2点に絞って本書の優れた点を紹介する。まずは1942年の南京での玄奘の遺骨の発見についてである。この点に関して現在の中国では、傀儡政権の統治下にあったにもかかわらず、中国の新聞が「聖遺物」の発掘の事実をスクープし、それによって作られた世論が日本の秘密裏の略奪を防いだという見解が公認されている。だがそのスクープなるものは、当時の日本側の新聞報道を中国側が後追したものでしかなく、現代中国の「愛国」言説の虚構性を指摘している。しかし、その一方で、著者は当時の中国の傀儡政権と日本軍の関係を「すがすがしい」と形容する議論（曾野綾子『なぜ人は恐ろしいことをするのか』講談社、2006年）にも与しない。著者は当時の日本側の史料に基づき、南京における日本仏教界の活動が振るわなかったことを明らかにし、さらにその原因は大虐殺云々だけではなく、その前後の戦争

の「惨憺たる」現実にあったことを、説得的に示している(47頁など)。

次いで指摘しておきたいのは、玄奘の遺骨が日本に持ち込まれるにあたって、公的なルートだけでなく、私的ともいうべきルートが存在した事実を明らかにしたことである。この点にも関わって著者は、本書の冒頭で「戦争責任」や故人の過失」を指弾するための著作ではない旨、断っている。本書の目的は「忘れられつつある事実を可能な限り記録し、政治的な歪曲や事実誤認を払拭」することである(12頁)。したがって評者も、著者の立場を尊重し、誰かを断罪することはしない。だが「大僧正と呼ばれた倉持秀峰や元文部大臣の岡部長景らが私的に遺骨を保管し」(167頁)、彼らを含む関係者に「玄奘の遺骨を勝手に分骨しあうことへの躊躇や戸惑いが不思議なほど見られない」という指摘には、素直に驚いた(161～162頁)。

というのもこの指摘は、たとえば松本清張氏が1958年の「真贋の森」のなかで主人公に語らせた日本社会の「闇」にも通じるからである。曰く「特権者だけが、材料を見られるという封建的な学問がどこの世界にあらう。西洋美術史とくらべて、日本美術史が未だ学問になっていないのはそのためだ」。つまり評者なりに敷衍すれば、美術品であれ、「聖遺物」であれ、日本の特権層はそれを所有することで、彼らの生きる世界で自らの地位を競い、広く民衆にそれを公開し公有財としようとはしない、たとえそれが善意から他人に分与されることがあっても、それはやはり仲間内での地位の高さを示すための行為でしかない、ということになるうか。紙幅の関係で十分に論じられないが、こうした事実は溝口雄三氏がいう日本の「公と私」の問題にもつながるように、評者には感じられる(『中国の公と私』研文出版、1995年)。

その他、玄奘の遺骨の台湾移送という宗教的行為が、反共主義の文脈で語られるようになるプロセスなどは、政治の持つ恐ろしさを実感させてくれる。本書は知的刺激に富んでいるのであり、読者諸賢に本書をぜひ手にとって欲しい。最後に言わずもがなの感想を一言。著者はさまざまな「縁」に導かれて、玄奘の遺骨がたどった不思議な旅を繙き、そのことによってこの旅を次の行程に進めた。だがその行く先は多様であり、政治的でもある。今回は仏教史と政治史をクロスさせた著者の歴史研究のテーマは、次はどのようなものになるのだろうか。多いに期待したい。(nmizuha@hiroshima-u.ac.jp)